



テキサス女教師

露出狂

春日信彦

露出狂

校長室では少し声を押し殺した会話が続いていた。秋元校長と篠田教頭はお互いの唇を見つめあい、困惑した表情で言葉を飛ばしあっていた。4月中旬に教育委員会の依頼で突然赴任してきた英語教師の板野バーバラ先生の服装のことで話が錯綜していた。彼女はアメリカテキサス州ヒューストンからの帰国子女で、10歳から17歳まで小中高とヒューストンの学校に通っていた。大学は英語力と財力でK大学文学部を卒業した。英語の発音に関してはネイティブに近く、英会話力はアメリカ人と同等であった。

彼女はド田舎の糸島中学の英語教師として赴任してきたが、この赴任はあまりにも唐突な事件で、校長はいまだ怪訝に思っている。秋元校長と板野先生との関係は簡単に言えば、彼女は学生時代の親友の子供であった。秋元校長にしてみれば、親友、板野光一の子供であるから、教育委員会から話を持ちかけられたときには、即座に二つ返事で快諾したが、なぜ、大金持ちでまだ若い25歳のレディーがこんな片田舎にやってきたかが、まったく腑に落ちなかった。

板野光一は現在NASAにいるはずだった。彼がNASAに行ってから一度も連絡を取っていなかった。板野と秋元は、中高は同じだったが、板野は理系、秋元は文系志望で、板野はT大理IIに進学し、秋元はW大文学部に進学した。板野は日本の航空会社にエンジニアとして勤務していたが、突然、NASAに行ってしまった。板野とは中高が同じだったということで、それ以上の親交はなかった。

板野光一の父親、板野太郎は衆議院議員で外務大臣を務めたこともある大物政治家であった。彼はシニア・ブッシュとかなりの親交があり、何度も渡米してはテキサス州を観光していた。週刊誌のゴシップに過ぎないと思えるが、CIA、ロスチャイルドとのつながりがあるのではないかとのうわさがあり、今でも政界では影のドンと呼ばれている。板野先生を狸や猪が出没する片田舎の糸島に赴任させたのは、祖父、板野太郎の策謀ではないかと校長は憶測してみたりもしていた。

今年の人事は、例年に無いものであった。アメリカ人を臨時英会話講師として全国の小中高で採用していた。これは英語力を強化する教育が今後なされていくことを示唆しているようであった。社会教育ジャーナリストによると、大学入試と就職の採用試験にTOEICが採用され、英語のリスニング能力が合否を決定するようになる。さらには、大手企業では英会話能力が昇進の鍵を握るようになる。

今後、大企業の幹部を欧米人が大半を占めるようになれば、通達、会議資料は英語で表記されることになり、欧米人並みの英語力がないと管理職が勤まらない時代がやってくる。日本は就職氷河期に突入しているが、就職難はますます激化する。欧米のエリートたちが日本の大企業を狙っているからだ。大企業は欧米人の採用枠を増設するため、日本人の大企業への就職がますます困難になっていく。

中小企業では低賃金で採用できる貧困国の労働者を優先するようになる。今後、他民族国家となりつつある日本においては、日本語より英語が重要視され、生活様態、文化芸能、学校教育においても欧米化するといえる。また、非正規の低賃金労働者の増加に伴い、経済力において大きな格差が生じるため、正規の教育が受けられない子供たちが増加する。アメリカの特徴である経済と教育における大きな格差が、極貧と無教育という悲惨な事態が、日本でもおきることになる。

特に、貧困庶民にとっては深刻な事態が今後待っている。公立学校と国立大学の減少だ。少子化に伴い公立学校が削減され、公立学校での義務教育を受けられない子供たちの増加、さらに、貧困のため学費が払えず学校に通えない子供たちの増加という、日本を崩壊させるような事態がすぐ目の前に迫っている。一方、富裕層の父母たちは多額の教育費を私立学校に支払って、彼らの子供たちはよりレベルの高い教育を享受し、一流企業にエリートとして採用される。この経済と教育の構造は、アメリカのエリート社会を構築した。今、日本もアメリカと同じようなエリート社会が構築されようとしている。

秋元校長は板野先生への非難を篠田教頭から耳にたこができるほど聞かされた。だが、彼女への指導は教育内容までであり、プライベートなことまではできなかった。篠田教頭は、板野先生の服装、態度、言動など気に入らない点を思いつくまま、数え切れないほど、赴任してきた当日から校長にまくし立てているが、秋元校長は黙ってじっと聞くしか事態を収めることができなかった。篠田教頭のヒステリーは、頂点に達しており、女同士の喧嘩が勃発するのではないかと日々びくびくしている。

校長室中央に置かれた黒檀のテーブルで対面していた二人であったが、次第に興奮した篠田教頭は秋元校長の右横に擦り寄っていた。「校長、早く、くびにしてください。あんなのは、教師じゃありません。淫乱で、露出狂でしかありません。もう、我慢の限界です」篠田教頭は校長に決断を詰め寄った。校長は、またかとうつむいていた顔をゆっくり持ち上げた。校長は右手で教頭の右肩を握り締め、グイッと引き寄せた。

「マリ子さん、これ以上興奮しては身体に悪い。確かに、板野君の服装は教員としてはふさわしくないと思う。誰が見ても、同じ意見だと思う。でも、服装に関して、特別な条例はないんだよ。教育基本法に服装に関する規制が書かれているわけでもないし。何度も言うように、校長でも、プライベートなことに口を挟むことができないんだよ。わかってくれないか」校長は唇が教頭の唇に接するほどに近づけ、懇願するように話した。

教頭の怒りは頂点に達していたが、校長に見つめられて、ほんの少し気持ちが落ち着いた。教頭は25歳で結婚して、2年後に離婚した。夫の浮気が原因であった。父親の勧めで、将来有望な32歳のK大卒銀行員と結婚したが、夫の態度に不信感を抱いた彼女は、私立探偵を使って、夫の素性を調べさせた。結果、夫には愛人がいて、結婚後も交際していた。極度に嫉妬深い教頭は、即座に離婚した。

秋元校長は2年前に24年連れ添った細君をガンで失った。56歳の校長は、再婚を考えたことはなかったが、教頭の誘惑に負け、肉体関係を結んでしまった。教頭は一回り以上年上で、3年後の衆議院議員選挙立候補に役立つ男性と再婚したかった。また、子供がいない教頭は、どうしても子供がほしかった。半年前、校長が板野太郎と親交があることを知ったとき、教頭は校長をゲットすることに決めた。策謀を立てた教頭は、校長のマンションに押しかけ、校長を陥落させた。

校長は年の差を考えたが、再婚を決意した。二人は再来年の退職後に結婚することに決めた。それまでは、二人の関係を悟られないように秘かに教頭のマンションで逢瀬を重ねることにした。今回の板野バーバラ赴任は思いもがけない事件となった。校長にとっては、親友の子供であるという理由で、板野に親切にしているだけであり、若さから出る勇み足をかばっているに過ぎなかったのだが、教頭はそのように取っていなかった。

教頭は校長の板野先生を見る目に強烈な嫉妬を感じていた。というのも、板野先生の服装は男の目を釘付けにするからであった。上着は、乳首が透けて見えるタンクトップ、スカートはチョーミニで、階段を上るときには真っ白いお尻が丸見えであった。毎日目を輝かせて男子生徒は登校し、男性教師は出勤していたが、教頭は校長が板野先生を見つめるたびに、真っ赤なマグマのような嫉妬が心の底から噴出した。

校長も親友の子供ということでかなり大目に見ていたが、このままではPTAからクレームが来ると懸念していた。糸島には風紀にうるさい父母が多く、このことが広まれば、中学校以外の父母からも苦情が来るような気がしていた。板野先生が、糸島を一刻も早く去ってくれることを願ってはいるが、ことが大きくなってからでは手遅れということにもなりかねない。校長の職歴に大きな汚点ができることになる。校長もいい方法はないかと考えていた。

「実を言うと、僕も困っているんだ。板野先生を怒らせると、君の選挙のことを頼めなくなるんじゃないかとね。板野太郎を怒らせたんじゃ、君の政治家への夢は水の泡となってしまうことは、火を見るよりも明らかだからね。本当に、どうしたもんだろう」校長は肩を落とすようにうつむいた。「まったく、あの子は何を考えているのやら、いったい、何しに来たのかしらね。糸島の風紀を乱しに来たのかしら」教頭は目を吊り上げて、腕を組んだ。

困り果てた校長も腕を組んで天井に目をやった。「ところで、英語の成績に何か変化が出ているだろうか？男子生徒の評判がいいのは、結構だが、急激に成績が落ちたということはないだろうか？」校長は成績が急激に落ちていることを期待した。「校長、大変なんです。成績がよくなっているんです。今まで、ろくに教科書を開かなかったような男子生徒が、宿題をするようになっていっています。父母から感謝の電話もいただいたんです。これじゃ、やめさせる口実が作れませんよ。最悪です」教頭は苦々しい顔つきで校長の横顔を見つめた。

校長は大きく目を見開き教頭に顔を近づけた。「成績は向上しているのか。ほっとしたが、とにかくやめほしいものだ。きっと、父母からの苦情が来る。その前に、どうかしなくては。清水の舞台から飛び降りた気持ちで、服装について助言してみるか。どうだろう、教頭」校長は教頭の同意を求めた。「え！それは、ちょっとまずくありませんか、板野先生を怒らせて、板野太郎にでも告げ口されたら、一貫の終わりじゃないですか」教頭は上ずった声で答えた。

校長はしばらく黙っていた。「でも、あの服装は、必ず、問題になる。責任は校長が取ることになる。どうすればいいんだ」校長は両手で頭を抱え込んでしまった。教頭は困惑した表情で校長をそっと抱きしめた。「校長、今夜ゆっくり、考えましょう、待ってます」教頭は校長の板ばさみを考えるといたたまれなくなった。突然舞い降りてきた悪魔のような板野の顔を思い浮かべると、無性に腹が立ってきた。

その夜の11時、校長は高田にある教頭のマンションに隠れるようにして忍び込んだ。教頭はいつものようにリビングのテーブルにブランディーを用意して待っていた。校長はそっとスリッパをはきテーブルに腰掛けた。ほっとした校長は、上着を教頭に手渡し、グラスのブランディーをほんの少し口に含んだ。「やれやれ、ここにくるのも気を使うよ。今のところ、教頭とできていることが知れるとまずいからな。でも、マリ子と出会えて、若返ったよ。再婚して、堂々と二人で街を闊歩したいものだ」校長は笑顔を作り、もう一口ブランディーを含んだ。

マリ子は校長の右横に腰掛けると、そっと目を閉じた。校長は唇をマリ子の唇に押し当てると、そっとブランディーを流し込んだ。マリ子はグイッと飲み込み、笑顔で話し始めた。「もうしばらくの辛抱ね、退職したら、すぐに式を挙げましょう。でも、子供が一刻も早くほしいの。妊娠したら、私は、3年後といわず、すぐに退職するわ。もう、40でしょう。一人でいいから、早く子供がほしいの。いいでしょ」教頭は高齢出産の不安を訴えた。

困惑した校長であったが、大きく頷き、しっかりと唇を重ね、透き通って乳首が見えるキャミソールの上からゆっくりと胸を揉んだ。シルクのキャミソールはマリ子の肌に心地よく触れていた。校長には一つの不安があった。8年もの間、性行為が無かったからだ。50前にして、まったく性欲がなくなっていた。別に、性行為が無くても夫婦関係はうまくいっていた。朝立ちも、ほとんどしなくなっていた。

マリ子との最初の夜は、勃起しなかった。そのことは、大きな心の傷となったが、最近、マリ子のリードで性行為ができるほどに、勃起するようになった。校長はこのことに感激するとともに、感謝している。マリ子と出会うまでは老後のことばかり考えていたが、再婚という新生活が待っていることに胸を膨らませることができた。マリ子は校長の服を脱がせると、ベッドに誘った。

裸になった校長はベッドに腰掛け、大きく深呼吸した。体調がいいときは徐々に勃起するが、心配事があったり、気にかかることがあると勃起しないことがある。校長は何も考えず、ぼんと両膝を叩いた。突然、校長の脳裏に黄色のコルベットが現れた。校長はポツリとつぶやいた。「黄色いコルベット」校長はぽかんとした表情でマリ子を見つめた。「え！黄色いコルベット？」マリ子は唐突な言葉に驚き、復唱した。

校長はぼんやりした表情で話し始めた。「最近、僕ね、外車がよく気になるんだよ。ほら、先生たちみんな、外車に乗っているじゃないか。君は、BMWだろ、稲垣先生は・・・クーパーだろ、石原先生は・・・ベンツだろ、東国原先生は・・・プジョーだろ、ルーシー先生は・・・ジャガーだろ、この先生は、外車が好きみたいだね。僕は、ホンダファンだから、インスパイアだけだね」校長は先生たちの外車を思い浮かべた。

きょとんとした教頭は尋ねた。「コルベットに乗ってる先生いましたっけ？」教頭は校長を見つめた。「あ、そう、それなんだよ、黄色いコルベット、先週の日曜日に佐賀の七ツ釜にツーリングに行ったんだ。愛車のフォルツァで。そのときのことなんだけどね、黄色いコルベットが止まっていたんだ。カッコいいから、少し離れてみていたんだけどね、近づいてみたいと思って、コルベットに向かって一歩足を踏み出したときなんだ、190ぐらいありそうなジーンズ姿の黒人がコルベットに向かって歩いてきたんだ。

一瞬ひるんで、目をそらそうとしたときだよ、その黒人の横にクロップドデニムにタンクトップの女性が一緒に歩いていたんだ。見た瞬間、目を疑ったんだが、確信したんだよ。誰だと思う？」校長は、答えは一つというような顔で教頭を見つめた。教頭は小さく頷き、答えた。「まさか！」教頭は答えを暗示した。校長は大きく頷いた。「そのまさかだよ！板野先生に間違いないと思う。きっと、板野先生だよ」校長はそのときの二人の姿を思い浮かべた。

教頭は校長のひざをぽんと叩き尋ねた。「それから、二人は？」教頭は校長のひざをつかみ、ゆっくりゆすった。「僕も、ちょっと気になったもので、よくない事だとはわかっていたけど、尾行することにしたんだ。でも、すぐにまかれちゃった」校長は両手の手のひらを上に向けて、首をかしげた。「だらしないわね~、どうして、必死になって尾行しなかったのよ。あ~も~」教頭は校長の右ひざをパチンと叩いた。

校長は顔をしかめると話を続けた。「思うに、二人は恋人同士だな。黒人は彼氏だよ。ただ、それだけのことだよ。気にすることはないさ」校長は弁解がましく話を締めくくった。教頭はムカついた表情で話した。「黒人の恋人ね、やっぱり、板野先生って、淫乱じゃないかしら、黒人とつきあうなんて、考えられないわ。きっと、大問題を引き起こすわ。さっさと、糸島から消えてくれないかしら」教頭は目を引きつらせていた。

腰掛けていた校長は、ごろんとベッドに仰向けに身体を伸ばし、両手を頭の後ろに回した。教頭は校長の右横に添い寝すると、校長の萎えているあそこに左手を当てた。「もう、彼女の詮索はやめましょう。きっと、淫乱なのよ。今年1年我慢すれば、来年は、消えるわ」教頭は言い終えると、校長の口の中に舌を押し込んだ。二人はしばらく舌を絡ませると、校長はマリ子の素肌をガードしていたレッドのキャミソールを剥ぎ取った。

謎の闖入者

平原遺跡公園に3月開店した甘党茶屋はのんきなものだった。お客が来るのは、12時から午後4時ぐらいまでだった。メニューは鯛焼き、一個200円とぜんざい、一杯450円で、今年いっぱい、二つのメニューでお客を集めることにした。主に、アンナが厨房でぜんざいを作り、さやかがウェイトレスをやった。6月にはいると思っていたより観光客が多く、甘党茶店に来る客も増えてきた。

6月8日(土曜日)12時少し過ぎ、ロングの赤毛で、メッシュのタンクトップにピンクのチノパンを穿いた女性が、暖簾を両手で開き、中の様子を伺うと南向きのカウンター席に腰掛けた。彼女はメニューを一瞥するとぜんざいを注文した。平原遺跡が見える窓際のカウンターに座った彼女にぜんざいをさやかが笑顔で運ぶと、突然、お願いを受けた。「私、糸島中学の英語の教師をしています、板野バーバラと申します。突然なんです、こちらの家に下宿させていただけないでしょうか。とても大きな邸宅でいらっしゃるもので、できればお願いいたします」バーバラは簡潔に話しをすると軽くお辞儀をした。

あっけにとられたさやかは、目を大きく開いてしばらくバーバラを見つめた。さやかはたいいていことでは驚くことは無かったが、初対面で、しかも会った瞬間にお願い事をする女性には驚いた。日本人であればまずこういうことはまずありえないが、バーバラはテキサスで子供のころ育ったため、時々日本人の感覚からかなり外れた言動を取ることがしばしばあった。彼女は資産家の家庭で自由気ままに育てられ、自分の意見はほとんど聞き入れられていた。そのことが、彼女の強引な性格を作り上げていたのかもしれない。

さやかはなんと答えて言いか戸惑っていたが、ひとまず、間をおくことにした。「ぜんざい、召し上がってください。その件は、お急ぎですか？」バーバラは初対面であり、彼女のことはまったく知らない。当然、さやかが自分の一存で決められることでもなかった。「はい、できれば今すぐにでも返事をください。何か質問があればなんでもお答えします。お願いします」バーバラはすっと立ち上がり、腰を直角に折って、深々とお辞儀した。この動作は、日本人以上に礼儀正しかった。

さやかはますますどうしていいかわからなくなった。さやかは直立不動になって、答えた。「しばらくお待ちください」さやかはその場をたち去り、厨房にかけていった。鳩が鉄砲玉を食らったような顔をしたさやかは、椅子に腰掛けぼんやりしていたアンナの二の腕を掴み奥に引き連れていった。「ちょっと、アンナ、変なお客がやってきたよ。下宿させろとさ！何？あの人、アンナ、会ったことある？」アンナはさやかが言っていることがよく飲み込めず、口を開けてぽかんとしていた。

アンナはさやかの右肩をぽんと叩いた。「さやか、落ち着いてよ。ゆっくり、アンナにもわかるように話しな。その、変なお客って、どこにいるの、会って見るから」アンナはさやかを椅子に座らせて、順序だてて話を聞くことにした。アンナはタンクからコップ一杯の温泉水を汲み、さやかに手渡した。さやかは目をぱちくりさせ、一口温泉水を口に含み喉に流し込むと、ゆっくりと話し始めた。

「ほら、25、6の女性が入ってきて、ぜんざいを注文したじゃない。その、彼女の話なのよ。今、ぜんざいをカウンターに運んで行ったら、さやかは初対面なんだけどね、突然お願いされたのよ。この家に下宿させてほしいって。びっくりしちゃった。そう、彼女の名前は何とかバーバラ、糸島中学の英語の先生みたいよ、本人がそう言っているから。まあ、悪い人には見えなかったけど。アンナ、バーバラって女性知っているの？」さやかは、さっき見聞きしたことを思い出しながら話した。

「え～・・・バーバラ、そんな女性は知らないわ。AV女優にもそんな名前、いなかったと思うけど。ま～いいや、とにかくあってみましょう。悪い人じゃなかったら、考えてあげてもいいじゃない。二階の4部屋は空いていることだし。女性であれば、話し相手にもなるし、亜紀の友達にもなるかもね。英語の先生であれば、亜紀の教育にもいいしね。とにかく、もっと詳しいことを聞いてみようよ。それからだよ」アンナはすっと立ち上がり、彼女がいるカウンターに向かった。さやかは追いかけるように、アンナの後に続いた。

カウンターではぜんざいを食べ終えたバーバラが、小さなノートPCを開いてマイケルにメールを書いていた。お店のお客はまだバーバラだけであった。赤毛の女性に近づくと、明るく声をかけた。「いらっしゃいませ、ぜんざいのお味はいかがでしたか？」丁寧な言葉遣いで、挨拶した。突然の声に驚いたバーバラは、さっと、ノートPCを閉じると振り向いた。即座に笑顔を作ったバーバラは、丁寧に返事した。「とっても、おいしかったです。オーナー様でいらっしゃいますか？」バーバラは、ちっちゃなウェイトレスがオーナーを連れてきたと推測した。

アンナはオーナーといわれて、胸を張って答えた。「はい、アンナと申します」アンナはバーバラを中央のテーブル席に案内すると、バーバラの向かいにアンナとさやかは腰掛けた。腰掛けると、即座にアンナは話し始めた。「先ほどぜんざいをお持ちしたこちらは、さやかと申します。さやかからお聞きしたのですが、私どもの家に下宿されたいとのことですが、ここがそんなに気に入っていただけたのですか？」アンナはなぜこの家に下宿したいのか不思議に思っていた。

バーバラは改まった顔つきで、ゆっくりと話し始めた。「私は、10歳から17歳までアメリカのテキサス州ヒューストンに住んでいました。父親はまだヒューストンで働いていますが、母と私は日本に戻ってまいりました。ヒューストンはいいところでしたが、やはり、日本のほうが住みよいと母が申しまして、私を連れて帰国いたしました。その後、K大学文学部を卒業し、祖父の選挙事務所で働いていましたが、子供たちに英語を教えたくて、福岡にやってきました。糸島中学で英語を教えています。現在は、高田のマンションに住んでいますが、いつでも引越しできる準備は整えています。よろしく申し上げます」バーバラは簡単に自己紹介をした。

さやかとアンナはバーバラが帰国子女と知って、彼女の態度に納得がいった。アンナは、バーバラは問題ない人物と感じたが、さやかはいまだ不審に思っていた。「バーバラさん、おじい様って、政治家でいらっしゃるんですか？」さやかは、選挙事務所という言葉が引っかかっていた。バーバラはほんの少し頷き、答えた。「はい、祖父は板野太郎と申します」バーバラはめったに祖父の名前を人前で口にすることは無かったが、信用してもらうために祖父の名前を告げた。

板野太郎と聞いたさやかは、一瞬、耳を疑ったが、真剣な表情から本当のことを言っていると判断した。アンナは、政治家の名前をほとんど知らないため、まったく反応しなかった。さやかは念のため、質問した。「元外務大臣の板野太郎さんでいらっしゃいますか？」さやかは丁寧に質問した。バーバラは即座に笑顔で返事した。「はい、今は経団連の理事をやっています」バーバラの口調は明るかった。

元外務大臣と聞いたアンナは、目をパチクリさせて話し始めた。「へ～、外務大臣のお孫さんなわけだ。それじゃ、お父様は、何をしていらっしゃるの？」アンナはバーバラに興味を湧いてきた。「父は、ヒューストンでスペースシャトルの開発をやっています。日本に帰ってくることは無いと思います」バーバラはちょっとテンションが落ちてしまった。アンナの顔は下宿に同意していたが、さやかは、なんとなく何かが引っかかっていた。

さやかはもう少し質問することにした。「気を悪くしないでね。帰国子女の女性と話をするのは初めてなの。バーバラさんって、ハーフでいらっしゃるの？鼻が高くて、美人だから」さやかは最初見たときからハーフと思っていた。「はい、父は日本人ですが、母はイタリア人です。母は大学で父と知り合い、卒業後、日本で結婚しました。母は、日本の文化がとても好きで、お花、日本舞踊、お茶などをたしなんでいます。今は、外語スクールでイタリア語を教えています」バーバラは美人といわれてハイテンションになった。

さやかは亜紀のことが気になっていた。もし、亜紀が嫌がったら断ることにしていた。「バーバラさん、今、この家に住んでいるのは、アンナと私のほかに、アンナの子供、亜紀がいるの。亜紀は小学1年生で、結構気が強い。亜紀の意見も聞かなければ、返事は出来ないのよ。亜紀は、2時ごろ友達の家から帰ってくると思うから、それまで、待ってくれる。ところで、ぶしつけだけど、彼氏はいらっしゃるの？」さやかは異性関係について確認しておきたかった。

バーバラはいやな顔を一つせず、当然のように話し始めた。アメリカでは、異性の話は日常の話であった。「いません、1年前まではいましたが、別れました。当分、彼氏を作る予定はありません。恋愛は好きなほうじゃないんです。そう、私の趣味は史跡巡りなんです。特に、卑弥呼の謎に興味があります。福岡にいる間に、九州の史跡を巡りたいと思っています。今の彼氏は、ハーレーダビッドソンかな。こいつと一緒にいろんなところに、遊びに行っていますから」笑顔を作ると、小さな声で笑った。

アンナは彼氏がハーレーと聞いて、感じるものがあった。アンナも車とバイクが彼氏だ。その共通点を知ったとき、彼女もレスではないかと、ふと、予感した。「バーバラさんは、子供は好きですか？」アンナは、念のため質問した。「はい、子供は大好きです。中学校の先生になったのも子供が好きだからなんです。将来は、アフリカの子供たちにも英語、イタリア語、日本語を教えたいと思っています」バーバラは将来の夢も話した。

バーバラが話し終えるやいなや、入り口前の芝生の庭に三台の自転車が飛び込んできた。中学生と思われる三人の男の子が、自転車を放り投げるように庭に駐輪すると、なにやら奇声を上げながらどやどやとなだれ込んできた。三人はテーブルに腰掛け、「たい焼き、3つ、カスタード」顔の浅黒い少年が大きな声で注文した。アンナは即座に厨房にかけて行った。さやかはテーブルに跳んでいって、JKのようにかわいらしく挨拶をした。「いらっしゃい、今日は3人ね」時々、やってくる二人の少年はよく覚えていた。

二人の少年は歴史部に所属しており、休みの日には自転車で糸島の史跡調査をしていた。浅黒い少年がカウンターをしばらく見つめ、仲間にささやいた。「バーバラ先生じゃね〜！」バーバラは周りを気にせずキーボードをしきりに打っていた。浅黒い少年が立ち上がり、彼女に近づいた。「バーバラ先生、こんにちは」少年は声をかけると、バーバラ先生は、キーボードを打っていた指を止め、振り向いた。「こんにちは、僕たち、糸中2年C組です」少年は改めて挨拶した。

バーバラは後ろめたいところをとがめられたようで、一瞬固まってしまった。担任を持ってないバーバラは彼の顔をまったく覚えていなかった。「あ、そうなの、2年C組の生徒ね。名前は何かだっけ？」バーバラは名前を知らず、気まずくなった。「2年C組の水崎です。これから、三雲遺跡に行く予定です。僕とテーブル左の尾崎は歴史部です。右の中村はクラスメートです。先生のおかげで英語が楽しくなりました。頑張ります」水崎はてきぱきと挨拶するとテーブルに戻った。

三人はたい焼きを食べ終わると、三人そろってバーバラに挨拶をして出て行った。それを見ていたさやかは、バーバラは信用できる人物だと思えた。だが、何か秘密めいたものを隠し持っているように思えて、まだ、素直に受け入れられなかった。三人が帰るとノートPCに向かってタイピングを始めた。しばらくすると、中年の夫婦らしき紳士淑女が様子を伺うように入ってきた。西側にあるテーブルに腰掛け、しばらくあたりを見回していた。

さやかが注文をとりにいくと、急にメニューに目をやり、ぜんざいを二つ注文した。さやかが始めて見る夫婦で、イントネーションから判断して、関西からの観光客のように思えた。さやかが夫婦にぜんざいを運び、厨房に戻ると亜紀がアンナと小さな声で話していた。厨房の掛け時計は1時52分を指していた。「お帰りなさい、亜紀ちゃん」さやかは声をかけた。アンナは亜紀にバーバラのことを話していたらしく、亜紀はさやかに問いかけた。「その人、お店にいるの？」亜紀は一刻も早く会いたい様子であった。

テーブルで向かい合った夫婦は静かにぜんざいを食べていたが、亜紀をバーバラにあわせることにした。さやかが亜紀をカウンターまで案内すると、子供に気づいたバーバラは、即座にPCを閉じて、カウンター席から降りて直立した。「バーバラさん、お待たせしました。亜紀です、こちらのテーブルでお話いたしましょう」さやかは東側のテーブルにバーバラと亜紀を誘った。しばらくして、アンナが厨房から四人分のお茶を運んでやってきた。

バーバラの隣にさやかが座り、向かいにアンナと亜紀が腰掛けた。さやかが口火を切った。「こちらが、バーバラさん、糸島中学で英語を教えていらっしゃるの。先生が、是非この家に下宿させてほしいといわれているの。亜紀ちゃんの意見を聞かせて」さやかは亜紀の意見を最優先するつもりでいた。亜紀はバーバラをじっと見つめていた。バーバラは気に入られよと笑顔で話し始めた。「もし、下宿させていただければ、いろんなお手伝いをします。家事でも、お店のお仕事も、よろしくお願いします」バーバラは亜紀に向かってお辞儀をした。

亜紀が一言質問した。「先生は、何歳？」亜紀は、バーバラの年齢がよくつかめなかった。バーバラは、ハーフのため、年齢が掴みにくかった。さやかとアンナも彼女の年齢を確認していなかった。「はい、25歳です、よろしく」バーバラは笑顔で答えた。亜紀は、さらに質問をした。「ピアノ弾ける？」亜紀の質問を待っていたかのように、即座に答えた。「はい、ピアノとバイオリンは得意です。カラオケも大好きです」バーバラは得意げに返事した。

亜紀は、ピアノが弾けると聞いて、ちょっと、うれしくなった。ピアノと一緒に遊べるような気がした。6歳からピアノを習ってはいたが、アンナは楽器がまったく弾けず、さやかもオルガンは弾けるがピアノは弾けなかった。突然、亜紀は笑顔を作り、明るい声を発した。「下宿していいよ」亜紀はバーバラを受け入れた。アンナはほっとした笑顔を作ると、バーバラに話しかけた。

「亜紀が、気に入ったみたいだから、下宿はOKよ。いつ、荷物を運び込むの？」アンナは引越しの具体的な話を始めた。バーバラは、笑顔を作り、すっと立ち上がり、深々とお辞儀した。「ありがとうございます。できれば、明日にでも、引っ越したいと思います。よろしいですか？」バーバラはいつでもスタンバイOKの状態だった。二階は誰も住んでいなかったため、簡単な掃除で入居できた。「いいわよ、部屋は今日掃除しておくから。明日の、何時に荷物が到着するか、後で、電話してください」アンナは早速引越しの段取りを取った。

作業員

安部病院地下3階の研究室は、いつもに無く緊張感が漂っていた。この研究室には、医療ロボットを研究するために、最高峰のスーパーコンピューターが設置されていた。だが、これは、表向きのもので、実際には、桂会長に雇われた数人の天才エンジニアが自由にコンピューターを操作開発していた。さらに、ここの会議室は、ドクターが特別に作らせたもので、特殊な電磁波で部屋を取り囲み、盗聴もGPSも機能しないような一室になっていた。

今、会議室では楕円形のテーブルを挟んだドクターとさやかが、深刻な表情で静かに会話していた。さやかは、月曜日と水曜日に精神科の看護師としてこの病院で勤務している。これも表向きのもので、さやかと連絡を取り合うために、ドクターが勤務させていた。今回の密談は、CIA 工作員に関することであった。「さやかさん、8月の暗殺計画については、すでにお話しいたしましたように、手はずは問題ありません。ただ、われわれが、警戒しなければならないことがあります。

8月に国防長官が来福するにあたって、CIAはすでに動き出しています。このことは、こちらでも承知していることだが、どうも、私を探っているようです。おそらく、私が九州各地の土地を買収し、病院を建設し始めたことを不審に感じたのではないかと思われます。桂コーポレーションが筆頭株主になっているK C J銀行から多額の融資を受けているわけですが、この融資に不審を抱いたと思われます。

すでに、桂会長と私のつながりは把握しているものと思われます。でも、桂会長と私が直接暗殺をすることは無いと考えているでしょう。したがって、彼らは、私とかかわりのある人物を探っているわけです。ルーシーとさやかさんが私とかかわっていることが判明すれば、二人は危険です。これからは、ルーシーとは直接会うことをやめました。さやかさんとは、勤務日にこの会議室で密会することは可能と思われますが。

ところで、さやかさん、最近、気にかかることはありませんでしたか？」ドクターは、さやかに警戒を強めるように暗示した。さやかは、一瞬、かみそりのような鋭いまなざしをドクターに見せると、小さな声で話し始めた。「ドクター、ちょっと気になることがありました。それは、私たちの家に下宿したいという糸島中学の英語教師が、突然、現れました。アンナと亜紀がとても気に入ったため、すでに、引越しを済ませましたが、どうも、彼女は気にかかります。

従業員と断定する根拠はありませんが、直感的に気にかかります。私とドクターの関係をどこからか入手したのでしょうか？」さやかは心のわだかまりを打ち明けた。ドクターは目を閉じて静かに聴いていた。「そうですか、危険を感じますね。もしかしたら、従業員かもしれません。さやかさんは、東京から福岡に勤務地が変わりましたね。この勤務地の変更は、不審に思うでしょう。おそらく、この点に疑いを持ったと考えられます。

彼女は従業員と考えていいでしょう。決して、彼女には気をゆるしてはなりません。万が一、地下組織の一員と感じ取られたならば、抹殺されます。彼らは、そういうやからたちです」ドクターは、直感的に彼女は従業員と判断した。さやかも小さく二度頷き、返事した。「わかりました。いずれ、こういう日がくることは覚悟していました。死を、恐れたりはいたしません。こちら、彼女が従業員であることが判明すれば、暗殺します」さやかは左手に拳骨を作った。

そのころ、バーバラ先生は校長室で校長を誘惑していた。バーバラは最近頻繁に校長室を訪れるようになった。校長室を訪れるのは、教頭ぐらいで、先生たちは校長室で校長と直接面会することはほとんど無かった。バーバラ先生は、他の先生たちの目も気にせずに、平然と校長室に入り浸っていた。バーバラ先生が校長の知人の子供であることを知っているためか、先生たちで彼女の陰口を叩くものは一人もいなかった。

校長も困り果てた顔を見せては、バーバラ先生を追い払おうと必死になったが、一向にひるむ様子が見られなかった。「校長、今夜付き合ってくださいませんか。二人だけで、飲むんじゃないんです。いつもの女友達も一緒なんです。いいでしょ、校長。私がお嫌いなんですか？新任の愚痴を聞いてあげるのも、校長の職務だと思いますけど。校長・・・」校長は、バーバラの誘いを何度か断っていた。だが、バーバラを怒らせて、祖父に身に覚えの無い悪口でも言われたならば、将来、教頭が立候補したとき、板野太郎に支援を依頼しづらくなるのではないかと考え始めていた。

「バーバラ先生、確かに、新任というのはいろいろ気苦労があります。私も、新任のころは、たわいも無いことで悩んだものです。それじゃ、返事はもう少し待ってください。メールで、5時ごろ返事します。それでよろしいですか」校長は、教頭にこの件を相談することにした。バーバラ先生は、とうとう校長は落ちたと確信し、モンローウォークで校長室を出て行った。校長はバーバラが消えるのを確かめると、即座に携帯を取り出し、メールで教頭を呼び寄せた。

メールを受信した教頭は、急ぎ足で校長室にやってきた。ソファーに腰掛け気まずそうな表情で待っていた校長は、教頭を右横に手招きした。初めて校長に呼び出された教頭は、よそよそしく、隣に腰掛けた。「悪かったね、急に呼び出したりして。ちょっと言いにくいことなんだけど、相談したいことがあって、来てもらったんだよ。今さっきのことなんだが、バーバラ先生に、クラブに誘われたんだけどね、断るべきだろうか、君の率直な意見を聞かせてくれないか。新任の頼みだから、困っているんだ」校長は、教頭の意見に従うことにしていた。

教頭は校長が言っていることがちょっと飲み込めなかったが、バーバラに誘われていることだけは、理解できた。「バーバラ先生が、校長をクラブに誘ったというのですね。前代未聞の重大事件ですわ。若い女性の先生が、しかも新任でありながら、校長をクラブに誘うなんて。やはり、バーバラは淫乱ですわね。校長はクラブに行きたいわけですね。いきたくなかったら、即座に断っていたはずですわ」教頭は校長の本心を探った。

校長は目を大きくして、弁解がましく返事した。「それは誤解だよ、君。わざわざ、君に相談したのは、君の将来のことがあったからじゃないか。バーバラ先生は、新任の愚痴を聞いてほしいと言ってきたんだ。それは、決して、間違ったことではない。だが、クラブで愚痴を聞くのもなんとなく公務員らしくないように思うんだよ。それに、君の立候補のことがあるじゃないか。うまく、バーバラ先生の機嫌を取っておけば、板野太郎への支援依頼がやりやすくなるんじゃないかとも思ったんだよ。だから、相談してるんじゃないか」校長は具体的に相談した理由を話した。

教頭はしばらく黙っていた。板野太郎と聞いたとき、教頭の野心がムラムラッと湧き起こった。本来、校長をゲットしようと思ったのも、選挙に利用するためだった。“校長を使い、板野太郎を味方につければ、当選する確立は一気に上がる。もし、校長がバーバラをうまく利用できれば、それに越したことは無い。頼る先生がいない新任のバーバラは、校長に甘えたいに違いない。”教頭は心でつぶやいた。

「そうでしたか。校長のお気持ちも考えず、申し訳ありません。新任というものは、話し相手になってくれる先生もいず、一人で悩むことが多くなります。その結果、うつ病になって、長期休職をされる先生もいます。そのことを考えたならば、校長のバーバラ先生への配慮は当然と思われれます。きっと、バーバラ先生も、一人で悩んでいるのかもしれませんがね。わかりました。バーバラ先生を助けてあげてください。じっくり話を聞いてあげれば、少しは気分も晴れることでしょう」教頭は下心を隠して誘いに乗ることに賛成した。

校長は教頭の賛成の返事を聞いて、うれしくなった。校長は、会うたびにバーバラ先生が好きになってしまった。そのことを教頭に悟られることが一番怖かった。「君の将来のためにも、うまくやって見せるよ。一度、じっくり話を聞いてあげれば、彼女の悩みも少しは解消することだろう。約束は、今夜なんだ。彼女に、OKのメールを送ることにするよ」校長は教頭のためにひと肌脱ぐことを約束した。

教頭は笑顔を見せると、校長の心を見透かしたように、言葉を付け足した。「決して、深入りしないでくださいよ。彼女に同情して、クラブの次に、ホテルに行くようなことはなさないでくださいね。私のことを忘れては、いやですよ。当選するかどうかは、校長の腕にかかっているんですからね」校長の欲望をくすぐるようなことを色っぽくささやいた。教頭は軽く校長の唇に人差し指を当てると、そっと立ち去った。

バーバラはアンナの携帯に、今夜、遅くなることをメールした。しかも、校長とクラブで飲むこともメールしていた。アンナとさやかは、このことも驚いた。新任の先生が、校長とクラブに行くというようなことは、日本ではありえないことだからだ。アンナは、彼女の単なる性癖と受け取ったが、さやかは策謀的なものを感じ取っていた。「バーバラって、大胆というか、男好きというか、帰国子女って、すごいわね」アンナは、バーバラをAV女優に誘ってもOKするんじゃないかとさえ思った。

さやかはドクターとの会話を思い出していた。ドクターは、自分がすでにマークされていることを告げた。さらに、ドクターにかかわっている人物もマークするに違いないと。さやかはアンナに警戒を喚起した。「アンナ、油断しちゃダメよ。彼女を警戒してちょうだい。今は盗聴されてないと思うけど、ついに、ドクターはマークされたの。私たちも、気を引き締めていかないと、やられるわよ。いいわね」アンナはゆっくりと大きく頷いた。

テキサス女教師

<http://p.booklog.jp/book/72539>

著者：サーファーヒカル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/72539>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/72539>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ